

生活世界の史料学

Researching Historical Materials of the Lifeworld

日時： 2023年12月9日（土）13:00～17:30
横浜キャンパス3号館2階205講堂/zoom同時開催

【プログラム】

開演 13:00 司会進行 前田 禎彦（日本常民文化研究所）

13:00～13:05 挨拶 安室 知（日本常民文化研究所所長）

13:05～13:10 趣旨説明 大川 啓（日本常民文化研究所）

13:10～14:00 基調講演 大門 正克（早稲田大学）

生活世界と史料読解 —被災地でのフィールドワークを例に

14:00～14:05 〈休憩〉5分

14:05～14:35 報告1 中村 只吾（富山大学）

『豆州内浦漁民史料』と近世漁村の生活世界

14:35～15:05 報告2 関口 博巨（日本常民文化研究所）

「祭魚洞文庫」にみる近世の出産と育児

15:05～15:10 〈休憩〉5分

15:10～15:40 報告3 板垣 貴志（島根大学）

和牛の歴史研究と生活世界

15:40～16:10 報告4 平山 昇（日本常民文化研究所）

近代の社務日誌から見えるもの

16:10～16:25 〈休憩〉15分

16:25～17:25 総合討論 司会 久留島 典子（日本常民文化研究所）、大川 啓（日本常民文化研究所）

※全体の終了時間が18時頃になる可能性があります。ご了承ください。

17:25～17:30 閉会（アンケート）

生活世界の史料学

Researching Historical Materials of the Lifeworld

日本常民文化研究所の創設者である洪沢敬三は、民具への着目や『絵巻物による日本常民生活絵引』の刊行など史料の領域を広げることで、日常の生活世界にアプローチする道筋を開拓した。

一方で1937年に刊行した『豆洲内浦漁民史料』に収められた3000点に及ぶ古文書について洪沢は、「漁業史料を中心とした常民古文書の集成」と呼び、約400年間の一村に起こった出来事の記録として大きく評価し、「本書は、あまりに常に見るもの常にすることは記録されず何事かの事件のみ書き残される歴史の影をまざまざと見せて居る如き気がする。一方学問に於ても社会的な仕事に於ても日常の何でもなことを忘れてはならないと云ふ反省を起さずには居られない気がするのであつた」と述べた。日常の生活世界を捉えるうえで、文献史料の限界も認識していた。

近年各地で起こる地震や水害など度重なる大災害は、日常生活のかけがえのなさを浮き彫りにした。日常の生活世界への関心が高まるなか、現在の歴史学はそこへどのようにアプローチしているのだろうか。

「生活世界の史料学」と題した本講座では、歴史学によるアプローチとその際の史料読解に焦点をおく。生活世界はどのような史料から明らかになるのか、またその際の史料読解のあり方とは、あるいは文献史料でどこまでアプローチできるのか、などの検討をつうじて、生活世界と史料についての議論を深める場としたい。

講師紹介

- ◆ 大門 正克（早稲田大学特任教授）
1953年 千葉県生まれ（歴史学）
『語る歴史、聞く歴史』岩波新書 2017年
全集日本の歴史15 『戦争と戦後を生きる』小学館 2009年
- ◆ 中村 只吾（富山大学准教授）
1981年 和歌山県生まれ（日本近世史）
「漁村秩序の近世的特質と自然資源・環境」『歴史学研究』963 2017年
『生きるための地域史—東海地域の動態から—』共著 勉誠出版 2020年
- ◆ 関口 博巨（日本常民文化研究所所員）
1960年 埼玉県生まれ
『近世村落の領域と身分』吉川弘文館 2021年
『古文書を学ぶ』御茶の水書房 2021年
- ◆ 板垣 貴志（島根大学准教授）
1978年 島根県生まれ（日本近現代史）
『牛と農村の近代史—家畜預託慣行の研究—』思文閣出版 2013年
『地域とつながる人文学の挑戦』共著 今井出版 2018年
- ◆ 平山 昇（日本常民文化研究所所員）
1977年 長崎県生まれ（日本近現代史）
『初詣の社会史』東京大学出版会 2015年
「「体験」と「気分」の共同体—20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム—」
『思想』第1132号 2018年

オンライン参加についてのお願い

【ミーティングアプリ「Zoom」のご利用について】

お手持ちのスマートフォン・タブレット・カメラ付きPC等で「Zoom Cloud Meetings」アプリのインストールをお願いいたします。Zoomは無料でダウンロードできます。

また、事前に必ずZoomの動作確認をしていただいた上で、ご参加ください。

【Zoom アプリでの参加方法】

- ① ミーティングに参加後、画面右上の「表示」をクリックし、スピーカービューに切り替えをお願いいたします。
- ② ミーティングに参加後「コンピュータでオーディオに参加」をクリックしてください。
- ③ マイクをミュートし、マイクのマークに斜線が入っていることをご確認ください。
- ④ 回線状況により音ズレや遅延が発生する場合がございます。通信の良好な場所での視聴をおすすめいたします。開始時刻になるとつながります。

◇表示名の変更方法（お申込み時のお名前にしてください）

- ① カーソルを下に動かし「参加者」をクリック
- ② 画面右、一番上にある「表示名(自分)」の「詳細」をクリック
- ③ 「名前の変更」をクリック、「お申し込み時のお名前」を入力し「OK」

◇スピーカービューへの切り替え

画面右上にある「ギャラリービュー」をクリックし「スピーカービュー」に切り替える

◇ご質問について

チャット機能より送信してください。

- ① 宛先 「共同ホスト」
- ② ご自身のお名前（表示名）・どなた宛・内容（簡潔に）

【その他ご案内】

今後の運営にあたり参考にさせていただきたく、終了後のアンケートにご協力ください。

回答方法は終了後にご案内いたします。※所要時間は約5分です。

ご協力をお願いいたします。

「生活世界と史料読解——被災地でのフィールドワークを例に」

2023 年 12 月 9 日 大門正克（早稲田大学）

はじめに

- (1) **講座の趣旨** 趣旨文の渋沢敬三 史料の領域拡張、文献史料の限界認識
- (2) **基調講演の課題** 報告の「と」の考察 「生活世界と史料読解」 関係の「と」
日常の「生活世界」の領域拡張、史料の拡張、文字史料の読解方法の拡張
- (3) **対象** 東日本大震災後の岩手県陸前高田市での私の調査と史料読解
近い時代 歴史なのか

1 生活世界の史料をたずねて 研究史

2 私の史料への向き合い方 文字史料と聞き取り

相違 身体性、対面性（聞き取り）、時間をめぐる問題

共通性 史料読解への留意、文脈を理解する

3 最近の私の調査

(1) 東日本大震災後の岩手県陸前高田市 フィールドワークとしての調査

風景とくらしのなかで話を聞く、史料をたずねる

現地を訪ねる、話を聞く、文字史料を探す

(2) 史料読解を深める

①保育史料の読解を深める 「高田の保育は**過程**を大事にする」、「**生命**を大切に
子ども」、高田の保育の「**お散歩**」

②修了文集のなかの「お散歩」を読む

③フィールドワークで佐々木さんのガイドを聞く 惹きこまれたガイド

「保育の過程」 **自然や物語と一体の時間のなかにある 生活世界の時間**

④文集を再度読み、飛びこんできた子どもたちの声と絵 **思い描いて聞く、読む**

4 聞き取りと文字史料の読解 まとめ

(1) 思い描いて耳をすます、読む 両者に共通のポイント

(2) 二つの史料読解の文脈を理解し、叙述する

5 史料読解をする人びと 若尾政希、沢山美果子

おわりに

(1) 講演の課題と方法を振り返る 共通点

(2) 史料読解のポイント

思い描いて聞く／読む、史料読解の文脈と生活世界の文脈を理解し、叙述する

(3) **歴史の醍醐味、歴史学の醍醐味**

史料読解のスリリングな過程

歴史＝時間のなかで考える 今日講演 過程/時間のなかで考えてきた

「すぐ身近なところにある歴史」

歴史は今の私たちを照らし出す ←**過程/時間のなかの歴史の醍醐味**

報告要旨

報告1 『豆州内浦漁民史料』と近世漁村の生活世界

中村只吾（富山大学）

本報告では、文献史料から近世漁村の生活世界へいかにして迫り得るのか、渋沢敬三が編纂した『豆州内浦漁民史料』を軸に考察する。生活世界とは、ある時代や地域ごとの「常識」をもとに成り立っているものと考えられる。それゆえ、時代や地域を異にする者が、それを認識し理解するのは、容易ではなかろう。

渋沢敬三は、1930年代、伊豆の内浦地域における旧津元（網元）家の人物との出会いを経て、『豆州内浦漁民史料』という史料集を編纂・刊行した。収録されたのは、戦国～明治にわたってこの地域の歴史を物語る文書の数々である。しかし、近世から現在に至るまで、場所を同じくしながらも、生活世界の内実は大きく変化しているであろう。たとえば、近世の当地では、立網漁（建切網漁）という網漁が特徴的であったが、その姿や面影は、もはやなくなって久しいのが現状といえる。たとえ数多くの史料が残されていても、現在の私たちが、それら文献史料から、いかにして近世の当地の生活世界の奥深く入り得るであろうか。

そこで、まずは文献史料から見えやすいことを考えてみる。村の差出帳の類からは、村の生業等、暮らしぶりの概要を見ることができる。また、人別帳の類からは、網元たる津元の家や津元のもとで立網漁に従事した網子の家、それぞれの所持高や屋敷の規模、家内人数がわかる。加えて、津元家と網子家の階層格差も確認できる。従来の研究では、漁業、なかでも立網漁およびそれに従事した津元と網子の階層格差に特徴づけられた世界としての内浦は、数多く論じられてきた。のみならず、立網漁以外の漁業への注目も、一定程度なされてきた。さらには、漁業以外の生業を追究した成果もみられるようになってきた。それでは、それらをもって、当地の生活世界を十分に捉えたことになるのであろうか。何か、それだけでは物足りないものがある気がしてしまう。

当地が平地や耕地の乏しい海辺の地域、集落であるからといって、海だけが生活の場ではなく、海陸あわせて営まれた生活であったこと、少なくともこれは前提にしなければなるまい。その土地での生活経験にもとづく事柄について、容易には言語化（特に文字化）しがたい部分もあろうこと、これにも注意せねばなるまい。生活世界においては、「感覚的」「雰囲気的」な事柄も多くあろうが、それらもまた文献史料には表れにくいといえる。渋沢敬三は、『豆州内浦漁民史料』には「三面記事」が含まれていると冗談まじりに自慢していたとのことである。その点に大切なことがあるように思われる。生活世界を構成するのは、しばしば、個々にはまとまりの見えづらい断片的で雑多なものではなかろうか。試みに『豆州内浦漁民史料』における「三面記事」的な史料をいくつか拾ってみると、当地の生活世界に生きた人々の息づかいが、雑多な諸相のなかに感じられる気がしてくる。かつて渋沢敬三が示した史料への眼差しの意味を、それからいくらかの時を経た現在、あらためて考えてみることで、生活世界に迫るための示唆が得られるのかもしれない。

「祭魚洞文庫」にみる近世の出産と育児

関口博巨

≪報告意図≫

祭魚洞文庫とは、1934年（昭和9年）、渋沢敬三がアチック・ミュージアム（1921年創設、日本常民文化研究所の前身となる研究機関）内に設立した文庫である。現在、この文庫は複数の機関（国文学研究資料館、流通経済大学、神奈川大学日本常民文化研究所、渋沢史料館、水産資源研究所など）に分散して保管されている。今回はかつてこの文庫の一部として収集されていた産育・生殖関係史料（古文書等）に注目する。

本報告の課題は以下の三点である。①複数機関に分散した産育・生殖関係史料コレクションを可能な限り復元する。②復元したコレクションから近世の生活世界の一端をなす産育や生殖の実態に迫る。③産育・生殖関係史料を収集したアチック・ミュージアム（渋沢たち）の関心がどのあたりにあったのかを理解する。以上の検討を通して、「生活世界の史料学」という統一テーマにアプローチしたい。

≪報告構成≫ 【 】には配布資料の史料番号等を示した。

はじめに

1. アチック・ミュージアムのまなざし — 産育・生殖関係史料一覧

【表】祭魚洞文庫産育関係史料一覧表（古文書）

2. 近世の産育と生殖 — 史料の紹介と検討

a. 子返し規制

【a-1】明和4年_子戻シ請印帳／【参考f】寛政5年_まびき教訓絵詞／【a-2】天明8年_此度重キ被 仰渡村中江申渡竈判ゆひ判帳

b. 出産管理政策

【b-1】天保4年_取極申組合村議定之事／【b-2】天保6年_懐妊改 組合村方書上帳／【b-3】天保5年_子供出生并懐妊之者御改書上帳

c. 子育て手当政策

【c】文政10年_小児養育料御手当小前帳

e. 奉公人関係

【e-1】明和4年_家来男女申渡し留／【e-2】寛政12年_奉公人仕方帳

おわりに

拙著『牛と農村の近代史—家畜預託慣行の研究—』（思文閣出版、2013年）

畜産の歴史 各時代と社会において家畜の持っていた多面的機能（蓄財・金融・保険）を視野に入れる
≠ 畜産業発達史（近代産業としての発達史）

- 序章 課題と視角
- 第一章 家畜小作概念の再検討
- 第二章 牛生産地域における家畜所有の歴史的展開
- 第三章 中国山地における蔓牛造成の社会経済的要因
- 第四章 中国山地における役牛の売買流通過程と牛馬商
- 第五章 鞍下牛慣行による役牛の循環と地域社会
- 第六章 中国山地の預け牛関係にみる信頼・保険・金融
- 終章 家畜預託慣行の盛衰と近代日本農村
- 附論 板垣家文書の史料群構造
- 聞き書きノート



〈里での使役を終えて山へ帰る鞍下牛の隊列〉
1955年頃に島根県旧能義郡伯太町にて長尾努氏が撮影した貴重な記録写真。戦後にも小規模な鞍下牛慣行は残存していた。

○ 家畜預託慣行

= 家畜を預託・賃貸借・共有する行為の総称

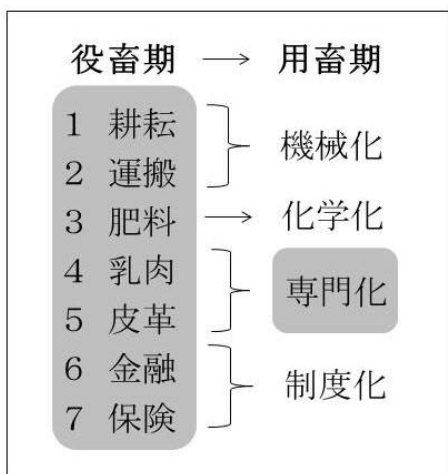
1880年代の松方デフレ期に飛躍的に拡大 → 1930年代後半から急速に衰退

⇒ 家畜を介して形成される人々の社会関係に着目

日本近代化に不可欠とされた要因や展開過程を解明

インフォーマルな社会保障制度（金融・保険） = 相互扶助慣行 = 農業共済 NOSAI の源流

○ 役畜から用畜への変化



農業機械の導入

⇒ 家畜の生命をつなぐ社会関係の狭隘化

⇒ 1955年頃～ 耕耘機の普及 化学肥料の普及

農業共済制度の整備

1947年 農業災害補償法（農業共済 NOSAI）へとつながる

⇒ 1930年代～ 1929年 家畜保険法施行

1931年 有畜農業奨励規則施行 1933年 農業動産信用法施行

1937年 森林火災国営保険法 1939年 農業保険法

○ 生活世界の史料学

Noisy な少数派の残した記録をもとに、史料読解によって Silent な多数派の生活世界にアプローチする
当該期の学者（家畜改良学、育種学）のまなざしを相対化（歴史家の史料読解）

⇒ 名もなき牛飼い農民の声を聴く

第 27 回常民文化研究講座「生活世界の史料学」

2023.12.9. (土) @神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 205 講堂 (+Zoom)

要旨 近代の社務日誌から見えるもの

— 一年中行事の近代史の試み —

平山昇 (神奈川大学国際日本学部)

本報告では、日常生活のなかの「不変」(変わりにくいもの) のように見えるものの中から、文字史料の活用を工夫することで「変化」を見出す手法として、神社の『社務日誌』から年中行事の近代史を明らかにするということを試みたい。

本論では、西宮神社に所蔵されている『社務日誌』を通じて、この神社の最重要年中行事である十日戎が明治から昭和初期にかけて、2度の「旧暦廃止」と阪神電車の開業に大きな影響を受けながら変遷していった過程を検討する。そこから見えてくるのは、一度目の「旧暦廃止」によっていったんは新暦と旧暦の「二つの十日戎」(新暦<旧暦) になったものの、1910 年の二度目の「旧暦廃止」によって新暦/月遅れ/旧暦という「三つの十日戎」となり、結局は「二つの十日戎」(新暦>旧暦) になったという複雑な過程である。

以上をふまえて、最後に趣旨説明で提示された以下の 3 つの問いに対して、年中行事の近代史という視角から回答を試みる。

(1) 生活世界はどのような史料から明らかになるのか?

年中行事の近代史を明らかにするのに有効なのは、社務日誌、新聞、個人の日記のように、特定の行事について年刻みで変化を追うことができる史料である。

(2) 史料読解のあり方とは?

一定のまとまった量の史料にまずは没入する、複数のアクターの史料をかけあわせる、文字史料を残さない人びとについてはある特定の場に「いる/いない」ことの意味を考える、ということを史料読解の際に意識している。

(3) 文献史料でどこまでアプローチできるのか?

西宮神社の社務日誌から見えてくるもの/見えてこないものということで回答に代えた。見えてくるものは、「不変」にみえる年中行事の「変化」の過程、様々なアクターの思惑や利害のせめぎ合い、外には出せない事情や本音である。見えてこないものは、最大級の激変期の詳細 (この史料にかぎらず激変期の部分にかぎって欠落していることが珍しくない)、女性や朝鮮人・中国人といったその地域に間違いなく存在したはずの人びとの姿である。

以上